

新学習指導要領における小学校 —『地理的環境と人々の生活』分野の枠組みと実践—

古谷 亨 仁

- I. はじめに
- II. 小学校における社会科学習と中学校・高等学校の系統性について
- III. 小学校での実践について
 - (1) 小学校第3学年の学習内容
 - (2) 「身近な地域や市区町村の様子」単元について
 - (3) 第3学年「市の様子の変り変わり」単元について
- IV. おわりに

I. はじめに

新学習指導要領の実施が小学校では本年度より行われており、高等学校では2022年度より実施される。そこで、本稿では小学校社会科学における地理学習、歴史学習の実践と学校社会科、高等学校地理総合への系統について考察している。

社会科のスタートカリキュラムである小学校第3学年の社会科学習は主として自分がすんでいる地域についての学習が中心となる。そのため、「地理的環境と人々の生活」分野についての学習が主となる。新学習指導要領では「生活の道具の変化」を再構成した新単元「市の様子の変り変わり」が加わった。ここでは、「歴史的環境と人々の生活」分野を主とした学習となる。本稿ではその2単元についての授業実践を報告する。

II. 小学校における社会科学習と中学校・高等学校の系統性について

小学校学習指導要領解説社会編¹⁾は社会科の目的を「社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」の育成としている。そこで必要となるのは、五感を伴った学びである。そのような学習により、地域の身近な社会事象の意味や役割を文脈の中で考え、実感を伴った理解を育み、社会参画への意識や主権者意識を高めることにつながると考える。

新学習指導要領では小学校の学習内容は中学校への系統性を踏まえ

- ① 「地理的環境と人々の生活」
 - ② 「歴史と人々の生活」
 - ③ 「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」という三つの枠組みに位置づけられている。
- ①、②は空間的な広がりを念頭に地域、日本、世界としており、③は社会的な事象について経済・産業、政治および国際関係と学習する対象を区分した。この枠組みは小学校での発達段階に合わせた物であり、中学校・高等学校での「地理的分野」「歴史的分野」「公民的分野」への接続を考えて設定されたものである。そこで重要となるのが、社会科における見方・考え方である。この見方・考え方を系統的に育むことが重要となる。

小学校での社会科における見方・考え方の視点は、「位置や空間の広がり」、「時期や時

キーワード：授業デザイン、授業実践、地理的環境と人々の生活、小学校社会科

間の経過]、「事象や人々の相互関係に着目して社会事象を見出す」という3点が明示されており、中学校での「地理分野」「歴史分野」「公民分野」へと発展し、高等学校での「地理総合」「地理探求」、「歴史総合」「日本史探求」「世界史探求」、「公共」「倫理」「政治・経済」へとつながっている。²⁾そのため、小学校段階での見方・考え方が中学校・高等学校での見方・考え方へとつながるものであり、小学校段階においてこの系統性を意識して社会的な見方・考え方を身に付ける事ができるように学習を進めていく事が必要であると考えられる。

Ⅲ. 小学校での実践について

(1) 小学校第3学年の学習内容

社会科のスタートカリキュラムとなり、主として地域の学習をする第3学年の目標³⁾は下記のようになっている。

- 1) 身近な地域や市区町村の地理的環境、地域の安全を守るための諸活動や地域の産業と消費生活の様子、地域の様子の移り変わりについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- 2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。
- 3) 社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う。

このように小学校3学年では主に居住して

いる市区町村の地理について学習し、地域に愛着を持ち地域の一員としての自覚をもつ事が重視されている。そのような土台をもって、第4学年では居住している都道府県、第5学年では日本全域の学習へと系統性をもって設定されている。

具体的な学習内容は次のように設定されている。

第3学年学習内容

1. 身近な地域や市町村の様子
 - ①「地理的環境と人々の生活」分野
2. 地域に見られる生産や販売の仕事
 - ③「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」分野
3. 地域の安全を守る働き
 - ③「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」分野
4. 市の様子の移り変わり
 - ②「歴史と人々の暮らし」分野

このうち地理的分野としては、「1.身近な地域や市町村の様子」だけではあるが、どの単元においても地理的な視点をもって学習に取り組むことが必要であり、地誌的な内容も包括されていると考えられる。また、地理を捉えるためには直接観察・調査をすることが重要であり、実感をもって学ぶ必要がある。しかし佐藤⁴⁾は「2017年度版学習指導要領では野外に出て地域の様子や直接観察・調査し、地域を実感的に理解するフィールドワーク学習が縮減されることになり、このことは大きな課題だ」と指摘している。そのため、フィールドワークに出ることなく、地理的な広がり学ぶことができるように単元設計をする必要があると考えた。

(2) 「身近な地域や市区町村の様子」単元について

第3学年最初の単元は「身近な地域や市区

町村の様子」となる。この単元は日常的に生活している市町村についての学習を進めていく事となる。しかし、平成2017年度学習指導要領では、学習内容の変更により、学習内容が実質的には増加しており、学習にフィールドワークを十分に取り入れることが難しくなった。そこで、生活科「地域と生活」で学習した学校周辺の地理や身近な地域についての既習知識を活用し、社会科の視点をもって地域を再発見していく学習計画とした。これは、指導要領で示されている、社会科における見方・考え方を活用し、地域の特色を捉えていく事で、地域を再発見し、住んでいる地域の良さを認識し、地域への愛着形成を図っていくとともに社会的事象を読み解く汎用的な資質能力を身に付けることを目標としたためである。単元計画については表1に記載しているように、まず、地図に表すという活動を行う必然性を生むために、地理的な視点をもって調べた内容を明石市に来訪する人に紹介しようという目的を設定し、明石市ガイドマップを作製していくという目標を立てた。これは2017年版学習指導要領で第3学年から「地図を活用する」ということが目標に示されているためである。そこから子どもたちは必然性をもって、地理的分野の導入として学校周辺のフィールドワーク及び地図の作成を行った。まず、既存の知識として持っている学校周辺の施設の場所を想起しながら図1のような簡単な地図を作製した。これは、明石市の子ども達が普段から認識しているランドマークや生活科の学習の中で活用した施設を設定し、それぞれの子どもの既存の知識でランドマークや道路・線路をつないだ地図である。

既知の認知の中で作図したものとなるため、個人によって大きな違いがある地図となった。この地図を他者と見比べる事で、認知のズレに気付かせた。人によって場所や方位などが違うため、一定の基準をもって地図

を作製していく事の必要性を感じ取らせ、作図に必要なことを学ぶこととした。また、実際の地図と見比べながら、必要な要素を抽出し、地図に掲載されている情報を読み取ることも目的とした。

このような学習から、地図を正確に表すためには共通の記号や縮尺、方位についての知識を押さえ、自分たちの地図にも必要な情報を整理して書き込むことができるようにした。また、地図上での情報だけで判断するのではなく、実際に観察することの必要性や重要性に気付くために、フィールドワークとして学校周辺の探索を行った。この周辺探索では、主要道路が書かれている学校の周りの白地図をもち、地域の様子を直接観察し、書き込みを行っていく事で現実の場所と地図での場所のマッチングを行いながら街の様子をとらえていった。具体的には、1km四方程度の地域について北側と南側での観察を2日に分けて行い、図2のように見つけたことをグループで話し合いながら、住宅が多い場所やお店が多い場所、海の近くには工場や港が多いこと、古いものが集まっている場所、公共施設が集まっている場所などの土地利用についての気付きや、高低差や道幅などの地形的な特徴に着目して、地図に表すことができた。このような活動の中で、抽象化された地図の読解能力及び作図能力を高めることがで

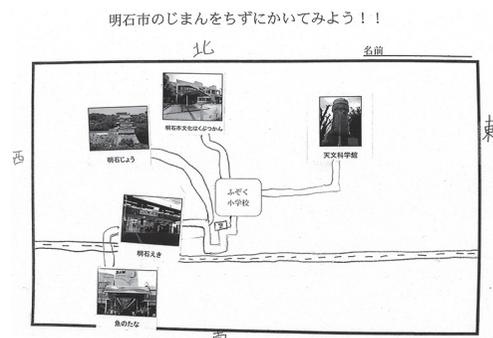


図1 児童が作成した学校周辺地図

表1 「身近な地域や市区町村の様子」学習計画

時	学習活動	◆支援・留意点
1	<p>○学校のまわりにある有名な「もの」や「場所」がどこにあるか交流をし、単元の目的を共有する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校の周りには自慢できるものがたくさんあるな。 ・自分たちは明石のことを知っていると思っていたけど、あまり知らないね。 ・オリジナルガイドマップをつくりたい。 	<p>◆既存の知識と現実の場所との差を感じることで実際に調べる必要があると感じ取るようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周辺の施設をシールにし、白地図に貼る活動から、認知の差を確認させ、地図に正確に表す必要性について気づくことができるようにする。 ・3年生では明石市の学習をすることをおさえ、1年間使う明石市の地図を作っていくという目的をもつ事ができるようにする。
2, 3	<p>○オリジナルガイドマップ作成計画をたてる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に歩いてみないと地図は描けないね。 ・地図には、どんなことを描けばいいのかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地図の書き方と方位について押さえる <p>◆実際に歩く道が分かるようにした地図を利用する。 地名や建物の名前もわかるようにしておく。</p>
4～6	<p>○学校のまわりを探検をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ここは前行ったところより人の数が少ないな。 ・ここは家が多いな ・ここは自然が豊かだな。 ・駅の近くは、人も多ししたても多いね ・車がきたよ。右に寄ろうよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校を中心に南北それぞれの方角に分けた地図を用意し、見学を行う。 ・見学する観点（住宅、道路、交通機関、公共施設、古い建物、地形、人の数）を設定する。 ・見学範囲は学校周辺に限定し、短時間で行うことができるようにする。 ・学校周辺のフィールドワークから明石市全体の様子をとらえることができるように留意する。
7～9	<p>○学校探検で見つけたことを班で交流し。白地図にまとめていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・北側は山が多いね。 ・西側は駅があって店も多いね。 ・南側は市役所や消防署などの公共施設が多いね。 ・東側は神社やお寺などが多くて道もせまいよ。 ・西側は駅があって人が多く集まるから、お店が多いんじゃないかな。 ・わかりやすい地図にするためには、どうしたらいいのかな。→地図記号 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校を中心にした地図を利用し、方角ごとにまとめ直すことで方角ごとの違いを感じ取れるようにする。 ・付箋を使って白地図にまとめる活動をすることで特徴を共有することができるようにする。 ・地図記号を活用すると地図が分かりやすく、多くの人に正確に伝えることができることに気付かせる。 ・学校周辺の地図を作成することを通して、読図に必要な要素を押さえることができるようにするとともに、作図のポイントをつかむことができるようにする。
10～11	<p>○明石市のほかの地域について地図から読み取る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・兵庫県の中では小さい市だね。 ・東西に細長い形をしているよ。 ・明石の西のほうはため池がいっぱいあるね。 ・西のほうは工場もたくさんあるよ。 ・明石駅や大久保駅の近くにはお店がたくさんあって人がたくさんいるね。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域ごとの特徴をとらえ、場所により土地の使われ方が違うことを捉えることができるようにする。 ・明石市が兵庫県内でどのような位置にあるのかを地図から読み取る ・明石市は東西に細長い形であることを捉え、鉄道も東西につながっていることを知る。 ・地図帳の利用方法について学ぶとともに、明石市の地図を使って様子をとらえることができるようにする。 ・地図とその場所の写真をマッチングできるようにし、地図からその場所をイメージすることができるようにする。
12	<p>○できあがった地図をもとに単元をふりかえる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校のまわりは、東西南北で特徴があることがわかったよ。 ・明石市は特徴的な地域がたくさんあるね。 ・ガイドマップができてうれしいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域ごとの特徴をとらえ、場所により土地の使われ方が違うことを捉えることができるようにする。

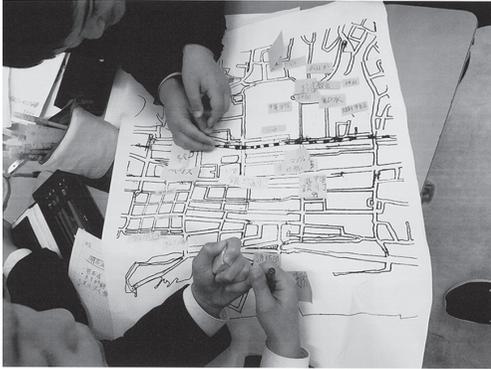


図2 グループでの学校周辺地図の作図

きたと考える。

その後、学校の周りから明石市全体へ視点を広げ、明石市教育委員会が作成した地図⁶⁾や社会科副読本⁶⁾を使って地区ごとの特徴についてまとめる活動を行った。これは学習指導要領で示された地図の活用能力の育成も同時に図ったためである。地図を使い、明石市の地理的特徴を読み解く中で、地図の色分けから土地利用について読み取った。また、学校の位置に着目し、住宅地の位置を読み取ったり、明石市の地域ごとの違いから住宅地・商業地が駅の近くに集まったりしている事に気づき、図3のようにまとめた。そこから「二見人工島には工業地が集まっている」「魚住には畑や田んぼが多い」「大久保には住宅地が多い」など立地と特徴を関連付けて考えることで地理的側面から地域の特徴を比較することができ、社会科の見方・考え方を働かせながら明石市の特色についてまとめることができた。

子ども達は見つけた事柄を地形や土地利用、交通機関、公共施設、歴史的な建造物に着目して分類しながら、白地図に明石市の土地の特徴をまとめる中で、明石市への愛着をさらに深めた。また地図の読図や作図を取り入れたことで地図読解力や地図作成力の基礎を育むことができ、地図活用力も向上したと



図3 児童が作成した明石市土地利用図

考える。

本単元での学習によって明石市についての理解を深め、次の単元である「市の様子の移り変わり」の学習とのつながりを持たせた。

(3) 第3学年「市の様子の移り変わり」単元について

「市の様子の移り変わり」の単元は2017年版学習指導要領において新たに設定された単元である。旧学習指導要領での「古くから残る暮らしにかかわる道具、それを使っていたころの暮らしの様子」の内容が再編成され、生活の道具も市の移り変わりを読み解く一要素とされた。「市の様子の移り変わり」の目標は「交通や公共施設、土地利用や人口、生活の道具などの時期による違いに着目して、聞き取り調査をしたり地図などの資料で調べたりして、年表などにまとめ、市や人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え、表現することを通して、市や人々の生活の様子は、時間の経過に伴い、移り変わってきたことを理解できるようにすること」⁷⁾とされている。これは主として「歴史と人々の生活」分野とされているが、それに加えて「地理的環境と人々の生活」とも深く関わっている単元であると考えた。それは、次の地理学概念(地理的な見方・考え方)⁸⁾を活用し、市の発

展について読み解いていく必要があると考えたためである。

- (1) 位置（の規則性）・分布（パターン）
- (2) 場所（その場所の自然や人文的特性）
- (3) 地人相関（自然と人間生活の関連性）
- (4) 空間的相互依存作用
（地域間の結びつきー貿易・交通）
- (5) 地域（空間的に意義のある範囲）

このような点からも本単元は地理的な視点をもって市の特徴を捉えていく学習であり、身近な地域の変化を学習していく中で、日本全体の社会の変化を概念的に捉えることができるようにする。これは、第5学年の地域学習、第6学年での歴史学習への系統性を捉えていくためにも、重要な視点である。そのためには歴史的な見方・考え方、地理的な見方・考え方を伸長できるように単元を設計する必要がある。具体的には、明石市の現在と過去とを比較しながら、明石市や人々の様子の変化を資料から読み取り、時間の経過による空間的な広がりや事象と人々の生活の相互関係を捉える事を意図し、単元計画を作成した。この単元計画では、児童の活動として、明石市の変化を「交通」・「土地利用」・「公共施設」・「人口」・「生活の道具」の5つの観点で年代と事柄の変化をマトリクスにした「タイムマップ」にまとめる活動を取り入れた。この「タイムマップ」は特徴的な年代について、写真や統計資料・インタビューなどから事実を読み取り、時間の経過による変化をまとめることで歴史的な社会的事象への見方・考え方を働かせて思考を広げて考えることができる。さらに、過去とのつながりを捉えることやそれぞれの観点と地域の発展を関連付けるとともに、社会科の見方・考え方の視点をもって観点同士を結びつけて考察することで、社会の変化の要因について理解することを目標とした。その上で単元の最後には地域のさらなる発展に必要なことを考える活動を設定した。明石市の発展の課題を解決するた

めに多様な角度から考える子どもの姿が現れることをねらいとしている。これらの内容から子どもの資質能力を伸長するためには、関連性や発展の要素を捉えていく事が必要となってくる。そこで時期による変化を捉えることができるように明石市ができた大正、戦前、戦後復興期、高度経済成長の量的な発展期、平成における質的な発展期の5つの時代に限定し、時代ごとの特徴をまとめることとした。しかし、様々な観点から総合的に市の変化を捉えていく事は第3学年の児童にとって高度な内容となるため、交通を中心に探究を行い、そこからそのほかの観点についての都市の変化を読み取る事とした。それと共に、生活の道具の変化や考え方の変化から、当時の人の生活の様子や社会の変化を理解する必要があると考えた。

以上の要点を踏まえ、単元の目標を「年代による明石市内の様子や人々の生活の変化を探り、『タイムマップ』にまとめる活動を通して、過去、現在、未来へとつながる、これからの明石市の在り方について探る。」と設定した。それを踏まえて後述の表2のように学習計画を設定した。

表2で表記しているように、単元導入では明石市の変化を捉えていくという課題を設定するために、明石市ができた100年前と現在を比較した。身近なものとして明石駅、明石公園、魚の棚商店街、附属小学校、山陽鉄道(JR)等の写真を資料として用意し、変化している事柄を見つけた。そしてKJ法を用いて「交通」「公共施設」「土地利用」「生活の道具」という4つの観点を抽出した。さらに人口推移から変化が顕著な年代を変化のポイントとし、大正10年ごろ、昭和25年ごろ、昭和45年ごろ、平成、令和の5つの年代を設定した。これらを組み合わせたマトリクスを「タイムマップ」と名づけ、それぞれの観点の時期による変化を見る横の軸とそれぞれの時期の社会を捉える縦の軸を設定した。児

表2 「市の様子の移り変わり」学習計画

構想の柱	学習活動	単元で創造したい 「納得解」に向けた手立て
<p>年代による明石市内の様子や人々の生活の変化を探り、過去、現在、未来へとつながる、「タイムマップ」にまとめる活動を通して、これからの明石市の在り方について探る。</p>	<p>くみつける＞1時間 写真資料を使って100年前と現在の様子の違いを話し合い、年代による明石市の様子や人々の生活の変化を捉える。 ・建物が変わる。 ・道が狭い。土の道になっている。 ・服装が変わる。 ・畑や田んぼが多い。 ・なんでこんなに変わってきたんだろう。</p>	<p>100年前の明石市の写真から今との違いを見つけ、明石市が大きく変化していることに気付かせる。またその変化の要因を予想し話し合わせることで、明石市の発展を調べていく活動への意識付けを行う。</p>
	<p>くみとおす＞1時間 明石市の人口の推移や学校数の変化の要因を予想し、4つの観点にまとめることで学習計画を立てる。 ・人口が増えるには住む場所が増えているはず。 ・交通機関が発達したからだろう。 ・学校が増えているから公共施設が増えているのだろう。 ・住みやすい街になっているからだろう。</p>	<p>「人口」が大きく変化した年代を取り上げるとともに、人口の変化の要因を予想し、「交通」「公共施設」「土地利用」「生活の道具」の4つの観点到集約する。それは年代と5つの観点を明石の発展を捉え、タイムマップ作製につなげるためである。</p>
	<p>くもとめる＞10時間 4つの観点で明石市の今と昔の変化をまとめる ○鉄道について調べ、現在と過去を比較し、市の様子や人々の生活の移り変わりについてタイムマップにまとめる。(2時間) ・明石駅の様子全然違う。 ・明石駅の周りに建物がたくさんできている。 ・家やマンションが増えている。 ・鉄道が発展したことで増えて人口も増えている。 ・鉄道は東西にしかならないから不便なところもある。 ○明石市営バスについて調べ、現在と過去を比較し、市や人々の様子の移り変わりをタイムマップにまとめる。(2時間：本時2/2) ・バスの路線が少ない。 ・なぜ増えているんだろう。 ・新しく住宅ができたところにバスが行くのではないか。 ・公共施設への路線が増えている。 ○「公共施設」「土地利用」「生活の道具」について調べタイムマップにまとめる。(6時間) ・公共施設は市民の生活を豊かにするために作られたんだ。 ・人口が増えて学校が足りなくなったから新しい学校を作ったんだろう。 ・住宅地が増えたのは働く場所や市民の生活と関係があるよ。 ・人工島や埋立地が増え、埋立地は工場や港に使われている。 ・埋立地は公共施設にも立っているよ。 ・洗濯板で洗濯するのは大変だ。洗濯機のほうがいいよ。 ・炊飯器は簡単に炊けるけど、かまどで炊くのは大変だ。 ・車を持つ家庭が増えてきているよ。</p>	<p>JR、山陽電車、新幹線の開通、駅の数や電車の本数、利用客の増加など市民の利便性が増していることが読み取れる資料を提示する。「交通」「土地利用」「人口」の観点を関連付けて考えることができるようにするためである。 市営バス路線が時代の経過に伴い増加していることから住宅地や工業地、商業地の開発、道路の開通、公共施設の増加を「交通」の観点で「タイムマップ」にまとめさせる。交通の変化によって市が発展し、人々の生活が向上したことを関連付けて考えることができるようにするため。 市役所の方へのインタビューを行う場を設定する。市の人々の努力を知り、市の発展に伴って公共施設が作られたことや公共施設が税金によって運営されていることを理解させるためである。 人工島や埋め立て地ができたことがわかる、昔と今の航空写真を提示する。工業地などの誘致から雇用が生まれ、明石市の人口の増加や経済的な発展に寄与したことに気付かせるためである。 文化博物館の方へのインタビューを行ったり、昔の道具を実際に使う活動を行ったりする場を設定する。生活の道具の利便性が増したことやそれを多くの市民が活用することができるようになったことから生活が向上してきたことを捉えさせるためである。</p>
	<p>くふかめる＞5時間 タイムマップを活用し明石市魅力アッププランを考える。 ○タイムマップをもとに明石市はどのように移り変わってきたかを話し合う。(1時間) ・「交通」と「土地利用」は互いに関連しあって発展してきた。 ・「人口」はほかの観点が発達することで増えているのだろう。 ○現在の明石市をより魅力的な明石市にするために実際に明石市がしている施策について学び、市の課題や魅力を確認し、明石市魅力アッププランを考える。(4時間) ・子どもに向けた施策をもっと増やしたほうがいい。 ・たくさんの方が明石に来てくれるように住みやすい街にしていこう。</p>	<p>これまで学級全体でまとめたタイムマップを黒板に提示する。5つの観点が相互に影響しあって発展していることをまとめさせるためである。 明石市が現在行っている施策についてインタビュー調査を行い、明石市の課題や推進している施策をもとに、より魅力的な明石市にするための観点をを見つけ、グループを作らせる。グループごとに学習内容を踏まえた上で課題にそった提案をすることができるようにするためである。</p>

童はタイムマップに書き込む事で、自然とそれぞれの観点の関連性や時期ごとの明石市の特徴を捉えることをねらいとした。

市の様子の移り変わりを追究していく段階では、明石市は古くから交通の要衝であることから「交通」の変化を捉えることで、そのほかの観点の変化に気付くことができるように、鉄道の変化と市営バスの変化についてまとめる学習を行った。

鉄道の変化を捉える観点としては、JR神戸線及び山陽線や山陽電鉄の駅の増加や新幹線開通といった地理的側面と電車の本数や所要時間といった量的な側面の変化を取り扱った。さらに、鉄道の発展と明石市の人口や乗客数を関連付けて捉えることで、鉄道による利便性の向上と人口増加の関連性や人口増加と土地利用の関連性など、市の様子の変化を関連付けて理解することができた。そして、鉄道の交通網補助路線としての役割を持つ市営バスを取り上げ、創業時のバス路線と創業50年後のバス路線を比較し作図する活動(図4、5)を通してバスの路線の延伸や新しい路線ができてきていることに気付かせた。

その上でバス路線の変化を現在の地図と照らし合わせて比較することで、住宅地や公共施設などに新路線が出来たことを捉えた。図6は児童の学習ノートの一部である。このノートで記述されているように多くの児童は「交通」と「土地利用」「人口」などを相互に関連付け、昭和期におけるバス利用者の推移から生活の基盤としてバスが活用されており、市民生活の向上に役立ってきたことを捉えることができた。

このような学習を基に「交通」の様子をタイムマップに記述し、時代による変化を捉えた上で、交通面の充実から土地の利用方法が大きく変化したと考えられる地域が実際にはどのように変化したのかを調べる学習を行った。

ここでは図7のようにiPadを使って、地



図4 バス路線図作成の様子

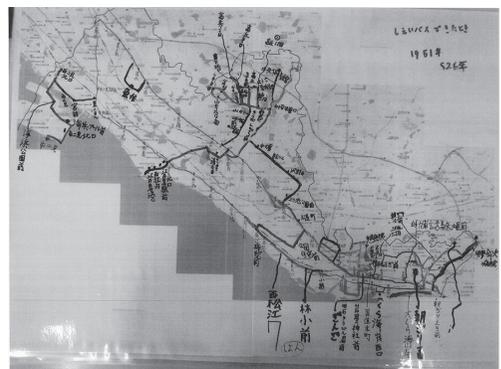


図5 児童が作成したバス路線図

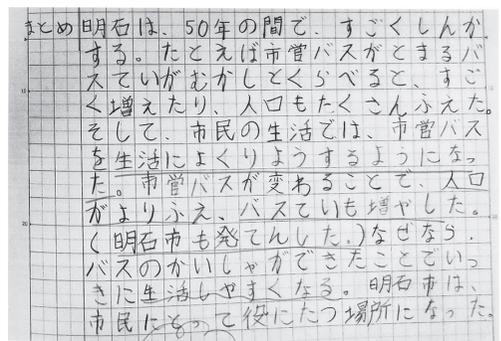


図6 バス路線の増加と市民の生活の関係を捉えた児童ノート

理院地図⁹⁾を活用した航空写真比較及び地図比較を行った。

前述の学習で見つけたバス停が増えた地点を、土地の利用方法が変化した場所であると



図7 地理院地図を使った土地利用の年代比較の様子

予想し、住所や場所を確認しながら比較を行った。特に大きく変化したことを捉えることができる地点として、東二見の人工島や海岸線の埋め立て地、朝霧地区に造成された明舞団地、大久保駅を中心としたニュータウンの造成、市民体育館、市役所の建築などがある。児童は航空写真の年代を操作し、高度経済成長期に大きく変化していることや、山や池、田んぼ等を住宅地や工場にしていることに気づき、明石市の発展や土地利用の変化について捉えることができた。

そこから現在までの変化のつながりを意識しながらタイムマップに記述し、土地利用の変化という横軸から考えられる明石市の発展の要素についてまとめる事ができた。また、市営バスの変化を中心とした「交通」の変化と「土地利用」・「公共施設」・「人口」・「生活の道具」の変化をタイムマップにまとめてきたことで、それぞれの関連性や相関性に気づき、図8のようにそれぞれの事象のつながりを捉え、まとめた。これは観点の関連性についても理解を深めており、それぞれの事象が相互に関わり合い、相関関係となることが市区町村の発展には重要であることを概念的に捉えることができたと考える。

このような学習を通して明石市の発展の要素について学びを深めていき、単元末には市

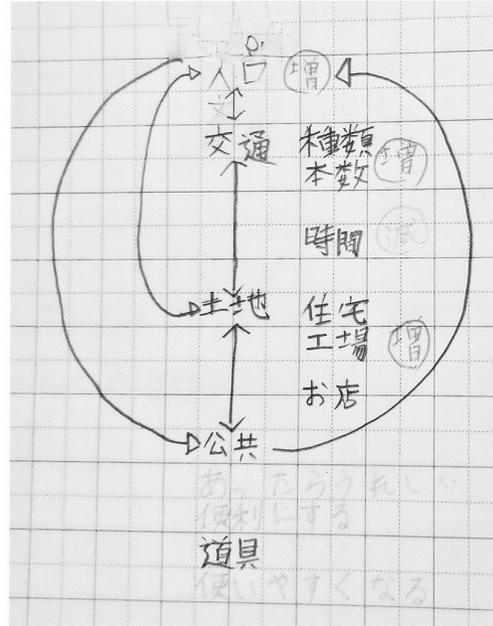


図8 市の発展を概念的に捉えた図

役所の方¹⁰をゲストティーチャーとして明石市の現状についての講話を聞き、これからさらに明石市が発展していくために必要なことを考える学習を行った。この学習の中で児童は、「市の発展のためには人口を増やす必要があるから、住宅地を作ったくさんの人に住んでもらったほうがいい」「子どもがいる家庭が過ごしやすい街にするために、保育園を増やすようにしたい」「障害を持った人やお年寄りも暮らしやすいようにバスを増やして、バリアフリーのまちづくりをすることが大切だ」など学習の中で獲得した市を發展させるための要因を活用し、明石市の将来について考えた。単元末では班ごとに明石市魅力アッププランを作成し、ポスターを使って発表を行った。このような学習を通して、自分と関わりのある地域の特色や地域の魅力を理解し、地域に対する愛着を深め、主体的に明石市の事を伝えていきたいという心情を形成することができた。

IV. おわりに

地理的分野の学習のスタートカリキュラムとして地域の特色を扱う単元と地域の歴史を扱う単元をつなげて扱うことで地域についての愛着を育み、地域の一員として主体的に取り組むことができた。「市の様子の移り変わり」の実践を通して、交通の変遷を中心に学習を進めることで、歴史的な見方・考え方をを用いて時期ごとの市の特徴を捉え、市が発展していく様子や市の発展の要因を概念的に捉えることができた。また、地理的な見方・考え方をを用いて位置や空間的な広がり捉え、地域の環境条件や人間の営みについて関連付けて捉えることができたという点については成果であると考え。しかし、市の様子の移り変わりの単元では、多くの観点を総合的に考えていくことが第3学年の児童にとっては難しさを感じた。さらに地域による差異も大きいいため、地域に合わせた教材作成には課題も多く残っている。また、フィールドワーク学習の縮減に伴うフィールドワークの代替については検討する余地が残った。さらに本実践の中では様々な地図を活用する機会を設定したが、第3学年の発達段階に合わせた地図の読図及び作図についても検討する必要がある。

ると考える。今後の研究課題としていきたい。
(神戸大学附属小学校)

〔注〕

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』文部科学省，2018，11頁。
- 2) 帝国書院資料編集部『社会科小中高の接続と「社会的な見方・考え方』』帝国書院，2019，5頁。
- 3) 前掲1) 15頁。
- 4) 佐藤浩樹「平成29年版小学校社会科学習指導要領の内容構成に関する考察—地理的な視点から—」地理教育研究23，2018，59-64頁。
- 5) 明石市小学校社会科研修部『わたしたちの明石市』明石市小学校社会科研修部，2019。
- 6) 明石市教育委員会『わたしたちの明石（改訂版）』明石市教育委員会，2019，16-28頁。
- 7) 前掲1) 44頁。
- 8) 井田仁康「『地理総合』とは何か」学術の動向24-11，2019，10-14頁。
- 9) 国土地理院「地理院地図<https://maps.gsi.go.jp/>，1961年～現在までの地図から比較を行った。
- 10) 明石市役所市制施行100周年記念事業推進室係長に講話をしていただいた。